

Kawasaki INnovation Gateway

Newsletter Vol.05

2014年3月発行



川崎市
KAWASAKI CITY
総合企画局臨海部国際戦略室
〒210-8577 川崎市川崎区宮本町1
TEL:044-200-3690 FAX:044-200-3540
<http://www.city.kawasaki.jp/shisei/category/57-1-0-0-0-0-0-0-0.html>

「ベンチャー魂」と「ダイバーシティ」が つくりあげた川崎臨海部 現代に引き継がれしその“熱きDNA”を追う!

「ベンチャー魂」をカタチにするエリア

1913(大正2)年、民間人である浅野総一郎が中心となって、鶴見川崎海岸地区の埋立を始めたのがきっかけで完成した京浜工業地帯。近代以降、日本経済を支え続けたのが京浜工業地帯であり、その中心である川崎臨



浅野総一郎

海部でした。日本人のベンチャー魂がカタチになって現れたエリアなのです。

産業都市として歩んだ歴史は100年という時を超え、常に時代の次の姿を追い求め、進化を続けながら、一刻とその「時」を刻んできました。

そこに現れたのが、殿町国際戦略拠点「キングスカイフロント」。この地で培われた、日本経済の基幹産業である製造業のものづくり基盤技術を活かし、ライフサイエンス分野など次の姿に昇華させる革新的な研究開発に取り組み、さらにそれを産業化につなげるイノベーション拠点として成長を始めています。

100年前の埋立から現在まで、川崎臨海部に連続として受け継がれる「ベンチャー魂」をカタチにする場所として、今新たに誕生したのがキングスカイフ

ロントなのです。

多種多様な人々が集まる 「ダイバーシティ」エリア

人類に大きな可能性を与えた“iPS細胞”による再生医療、ナノテクノロジーによる難治がんやアルツハイマー病など脳神経系疾患の革新的治療など、キングスカイフロントでは最先端の研究開発が行われます。

さらに研究開発だけにとどまらず、この結果を広く社会に普及させ、これまで治らなかった病気の治療を誰でも受けられたり、新しい製品やサービスにつながったりといった「社会実装」に向けた取組みが同時に行われます。

これらの取組みは、多種多様な異なる立場の人々のアイデアを結集し、組み合わせることによって、従来困難とされてきたものを突破し新たな価値を生む「オープンイノベーション」によって進めていきます。

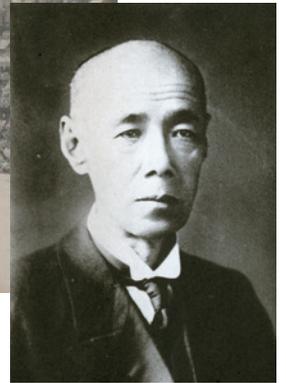
川崎には、水路・陸路の要所があり、元来人々が行き交う土地でした。また、京浜工業地帯では地方出身者や外国人の労働者も多く、古くから多様性に富んだ土地でした。川崎は、オープンイノベーションに必要なダイバーシティの土壌も併せ持っているのです。

“カワサキ”という 求心力の源にあるのは…

ベンチャー魂とダイバーシティ。現在、日本が抱える課題を打破すると期待されているこの二つのキーワードは、既に100年前から川崎に存在しています。かつて発展の源となり、現在求心力となっているものです。



横浜精糖株式会社



初代川崎市市長・石井泰助

京浜工業地帯の生みの親・ 浅野総一郎が描いた夢

川崎は、明治時代以降、急速に産業都市として発展・変化を遂げてきました。

1905(明治38)年頃には大規模な土地を安価に提供することで企業の誘致が積極的に行われ、横浜精糖株式会社(のちの明治製糖、現・大日本明治製糖)や、東京電気株式会社(現・東芝)が、川崎で操業を始めます。

そして、“産業都市・川崎”を語る上で決して欠かせないのが浅野総一郎の存在です。

「京浜工業地帯の生みの親」と呼ばれた浅野氏は、裸一貫で「水売り」(砂糖水の売り歩き)から出発しました。のちにコークスやコールドールなどの廃物を、石炭の代わりにセメント製造の燃料として用いる方法を開発し、その事業で富を得た浅野は官宮深川のセメント製造所の払い下げを受け、経営に乗り出します。自ら石炭にまみれ真っ黒になって働く浅野に驚嘆した実業家・渋沢栄一は、浅野を私邸に招き入れ、次第にその親交を深めていきました。

その後、イギリスやドイツ、アメリカでの港湾開発を視察した浅野は、その発展ぶりに大きな衝撃を受けます。帰国した彼は、諸外国のそれとは比較にもならないほど旧態依然とした古い横浜港を目の当たりにしさらなるショックを受け、大きな決心をします。

「港湾を整備し、日本初となる工場一体型の臨海工場地帯の建設に乗り出そう！」

この大規模な浅野の計画に、神奈川県は当初二の足

を踏んだと言います。しかし、渋沢同様、浅野のチャレンジ精神、ベンチャー魂に心を打たれた実業家の安田善次郎がさらなる支援者として加わったことで、計画は大きく動き始めました。浅野の夢は多くの人々の心を魅了し、突き動かしたのです。

「産業都市・川崎」の 礎を築いた立役者

そして、ここ川崎にも、浅野同様、大きな夢に燃える人物がいました。1872(明治5)年の新橋―横浜間の鉄道開通などで、急速にさびれた川崎の町勢を「なんとか立て直したい」と考えていた川崎町長(当時ののちの初代川崎市市長)の石井泰助。町の回復・発展のために工場誘致を計画、広大な土地の買収に自ら積極的に乗り出していきます。尽力する石井の姿に町民も次第に賛同、鉄道輸送や多摩川の水運といった地の利の良さに加え、地元側の協力的な受入体制という絶好の環境の中、横浜精糖や東京電気をはじめ、日本蓄音器商会(現・日本コロムビア)、鈴木商店(現・味の素)など、多くの企業・工場がこの地で誕生していったのです。

夢と希望を持った多くのチャレンジャーが集う川崎。それは、この土地で夢を見、様々な挑戦をしてきた産業戦士たちが残したDNAが土地に根付き、新たな挑戦者を惹きつけているからでしょう。そのDNAこそ、ベンチャー魂とダイバーシティ。キングスカイフロントでは、さらに世界中から人が集まり、行き交い、アイデアをぶつけあう場を目指していきます。

京浜臨海部埋立開始から100年経った2013年、11月19日に第18代川崎市長として、カワサキの“熱きDNA”を未来につなぐバトンを受けとった福田紀彦市長。これからの川崎臨海部と日本について語ります。

Q 川崎臨海部の発展は、浅野総一郎の埋立事業から始まっているといえます。歴史を振り返って率直な感想をお聞かせください。

A 持続可能なまちにしていくには力強い産業都市づくりで経済の基盤をしっかりとつくっていくことが大事です。浅野総一郎は時代を先取りして、川崎に素晴らしい礎を築いてくれました。

Q 京浜臨海部埋立開始から今年で101年目を迎えますね。今のお気持ちを教えてください。

A 100年前からある工業地帯が時代とともに変貌を遂げている姿を多くの人に知っていただきたいと思います。そして、我々もキング スカイフロントの形成などを通して、さらに次の時代に向けてのステップアップを後押ししていければと考えています。

Q 川崎臨海部には、“熱きDNA”が引き継がれている地域だと思います。それはどのようなものですか。

A この場所は民間の力で日本や時代を牽引してきたのです。今でも立地企業はじめ、川崎臨海部に関わる皆さんはそういう気概で未来に向けて取り組んでいます。こういう気持ちにさせるエネルギーが間違いなくありますね。

Q 2014年度は、iCONも竣工・運営開始を予定しています。動きの多い一年になるかと思いますが、2014年の意気込みをお聞かせ下さい。

A 本市は広域指定での国家戦略特区の候補にもなっており、中でもキング スカイフロントは、国家プロジェクトとしても重要な拠



点と認識しています。新たな健康関連産業を創出し、健康長寿社会の実現に志を高く持って取り組みたいと思います。

Q 福田市長は未来の川崎臨海部の発展を担っていきませんが、このエリアをどのように発展させていきたいですか。

A 川崎臨海部、特にキング スカイフロントは羽田空港国際線ターミナルの目の前です。この立地優位性や国の制度を活かして、新しい価値を生むことのできるアジアのシリコンバレーを実現させたい。そのためにも羽田連絡道路をぜひ実現させたいと考えています。

「キング スカイフロント」の紹介短編動画、 川崎駅「アゼリアビジョン」で3月25日から放映決定!

YouTubeでも配信中!

「King SkyFront Youtube」で検索!

<http://www.youtube.com/watch?v=arUolkCvoN4>

ライフサイエンス・環境分野における世界最高水準の研究開発と、そこから新産業を創出する国際的なオープンイノベーション拠点の形成が進む「キング スカイフロント」。

国内外から夢と希望を持った多くの「挑戦者」が集結し、今、まさに大きなイノベーションが起きようとしているこの地は、世界中から大注目を集めている、最も“熱いエリア”。

このキング スカイフロントをより多くの方に知っていただけるよう、コンセプトを凝縮した短編動画を、川崎駅「アゼリアビジョン」で放映します。



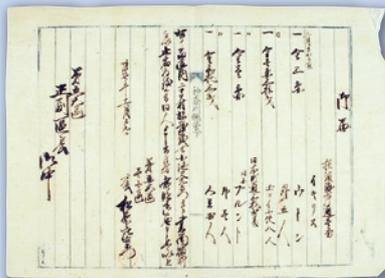
JR川崎駅東口側
(アゼリア地下街側)に
設置されている
大型画面

Column KAWASAKI

黒船来航、横浜開港! その時カワサキは?

横浜周辺外国人遊歩区域図/1867年頃
(所蔵: 横浜開港資料館)

外国人止宿届/明治7年(出典: 高津区・田村家文書)



イギリス人ウトンほか5名が、ボーイ8名とともに
二子村の旅籠亀屋に宿泊した際の止宿届



ヨコハマに居留する外国人の遊歩域を示した地図。
赤いラインで引かれた内側が、そのエリアであった

既に世界から人が訪れるエリアでした。カワサキは、ペリー来航の時代には、特に人気だったのが川崎大師で、大勢の観光客が集った痕跡が、本や写真などで紹介されています。

また、外国船の安定した航行のため船底にしく「船足砂利」として、多摩川の砂利への需要が増え、小杉村をはじめとする流域の村々から多くの砂利が横浜へと輸送されたとも言います。

川崎と横浜開港のかかわりは、観光にも及びます。外国人の遊歩域内にあった川崎には、開港以来多くの外国人観光客などが訪れていました。溝口や二子、登戸の宿には、外国人が宿泊していた記録が今も数多く残されています。

入江の埋立地であった横浜の開港場は、飲み水だけでなく伝染病や火事にも悩まされていました。さらに外国貿易によって人口が増え、上水道問題は深刻に。そこで大きく貢献したのが、多摩川などを水源とする人工用水路「二ヶ領用水」でした。川崎市内を流れるこの用水路から引水し、外国人居留地の水を支えたのです。

1859年7月1日(安政6年6月2日)の横浜開港は、少なからず周辺地域にも様々な影響を与えたと言えます。中でも、横浜からほど近い川崎は、様々な関わりを持ち始めます。

1859年7月1日(安政6年6月2日)の横浜開港は、少なからず周辺地域にも様々な影響を与えたと言えます。中でも、横浜からほど近い川崎は、様々な関わりを持ち始めます。